平成２８年度　文化展描画部会　反省と講評

《描画展全体》

今年度も各学校から出品された作品を一堂に集め、複数の審査員により各学年３０点を選出するという方法で審査を行った。各部会の負担が軽減されることや複数の審査員の協議による審査のため、選出の傾向が偏りにくいことなどが利点である。しかし、直接、作品評やアドバイスなどを伝えることができなくなったので、下の審査講評を参考にして欲しい。また、各部会で名簿の集約を確実にしていただいたおかげで事務作業をスムーズに行うことができた。名簿と作品の名前の違いやタイトルが入れ替わったりしていたものがあり、提出する前に各学校で十分な確認をお願いしたい。

《小学校審査講評》

【低学年】

動きがありやわらかな線で生き生きと描かれている作品が多かったが、虫などを題材とした作品が多くかたよりがあった。低学年では、いろんな発見で心が動かされることも多くあるので、幅のある中から題材を選ばせたい。また、１年生の作品の中に描きすぎたため、中心がわからなくなっているものがあった。低学年では、主題をはっきりさせ、脇役を効果的に配置し、輪郭線を工夫して印象を強くしたり、単調な色合いは重ね塗りの技法などを効果的に使って仕上げていくとよいと思う。

【中学年】

人物画では、肌の色がきれいな作品や全体的に明るい作品が多かったが、リコーダーを題材にして描かれた作品が多く少しかたよりがあった。写真を使いすぎているのか、動きが止まっている作品があった。のびのびと描かせるために、観察をしっかり行いイメージをふくらませてから描くようにするとよいと思う。また、背景がほとんど描かれていない作品があった。背景は中心となる人物などの情景をイメージさせる脇役としての効果があるため工夫して欲しい。ただ、そのままの背景を描いてごちゃごちゃさせてしまうと、中心がぼやけ逆効果となることもあるので気をつけさせたい。

【高学年】

高学年は構図もよく色の彩色も美しかったが、やや色が薄い作品があり、塗り込みをもっとおこなうと完成度が上がると思う。風景、人物など学年に応じた題材が選ばれていたが、少し神社を描いた作品が多いように感じた。また、風景画で仕上げにしっかり縁取りをしなおした作品があったが、しすぎると絵がかたくなり平面的になりやすいので気をつけさせたい。中には影に縁取りがしてあったものもあった。中学校では、縁取りをやめ、陰影でものの形をはっきりさせたり、立体感を出させたりする。高学年でも縁取りだけに頼らず、陰影を意識して描くことも目指してよいと思う。

《中学校審査講評》

【中学１年生】

下書きの線は、塗る前に消しておくと良い。他学年と比べて描き込みが足りないように感じた。１年生は、特に薄くなりがちなので、あらかじめ色彩の学習と濃く塗るための見本などを見せておくとよい。線ではなく面の明暗でとらえて描くように心がけさせたい。遠近感の指導はしっかりなされていた。

【中学２年生】

２年生は一番描きこみの時間が少なく厳しい状況の中、良質の作品が多く見られた。人物画の自画像において、バラエティーに富んだ表情が見られ、自分をしっかり見つめ、心の内面をよく表現された作品が多かった。風景画では、透視図法を用い遠近感や奥行きを感じるものが多く、明暗をつけ立体的に描かれた作品も多かった。もっと描き込めばよくなる作品も見られたと思う。

【中学３年生】

構図やテーマも良い。個性豊かな作品が多い。時間をかけてじっくり描かれた作品が多かった。描きこみにかけては、すみずみまで行き届いていた。作品はほとんどが風景画であったが、テーマを意識して作品に取り組んでいた作品が多かったと感じた。３年間の思いが伝わってくるようで、絵からその風景に対する愛情のようなものを感じ取れた。